

【シンポジウム】

ワイルドとその周辺における男性性の再定義をめぐって

ジョージ・ギッシングの言葉を用いた、今や古典となった E. ショウォールターの著作のタイトル『性のアナーキー』(*Sexual Anarchy*)という語が示唆する通り、ヴィクトリア朝後期は、セクシュアリティに纏わる境界線に大きな揺らぎが生じた時期であった。「フェミニズム」や「ホモセクシュアリティ」といった新たな語は、女性性と男性性の再定義を促し、唯美主義、性的逸脱、デカダンス等、ワイルドに付与される形容もそれらと深く関係した。しかしながら、無秩序な状態とは伝統的な思想や制度から完全に断絶したものではなく、それらの強化ももたらした。したがって、この境界線の模索は常に緊張関係を孕んだものであった。それはまた、政治、経済、法律、倫理、階級、消費など、様々な事象と複層的に絡み合っていた。特に 1990 年代以降今日まで、当時の性に纏わる活発な議論が絶えないのはこうした状況を表している。このような観点から本シンポジウムでは、ワイルドとその周辺における様々な文学的、文化的事象を題材とし、それらに見られる男性性及びその再定義について考察したい。

学校物語に描かれた少年像—タルボット・リードの作品を中心に

藤井佳子

ワイルドが活躍した頃、少年雑誌 *Boy's Own Paper* (1879-1967) が人気を博していた。タルボット・リード (Talbot Baines Reed, 1852-93) は同誌の創刊以来、スポーツ記事や学校物語の連載を続けて、読者である少年たちから圧倒的支持を得ていた。

1840 年代頃から増え始めた少年学校物語は『トム・ブラウンの学校生活』(1857)で一つの頂点を見た。全編が男らしさ称揚であるこの作品は、“Muscular Christianity” (筋肉的キリスト教) 関連で論じられることも多く、以後、追随する作品が陸続と生み出された。それらの作品に登場する闊達なスポーツマンで喧嘩も強い主人公は、その男らしさゆえ、周囲の少年たちに慕われてリーダーシップを発揮し、友情に恵まれ、柔弱な同級生や下級生とも親密な関係を構築する。

発表ではイギリスにおける学校物語の流れを簡単に見た後、タルボット・リードの代表作 *The Fifth Form at St Dominic's* (*Boy's Own Paper* 連載 1881 年 10 月から 82 年 6 月、出版 1885 年) と *My Friend Smith* (1882 年 10 月から 1883 年 6 月、出版 1889 年) を取り上げ、精神性に着目して描かれたタルボット・リードの少年たちと、それまでの学校物語が理想として掲げてきた少年像との相違を探る。

イギリス世紀末文学のなかには、生身の女を自己の欲望のままに表象する男たちが登場する。ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(1891)でシビル・ヴェインの自殺を劇中のエピソードと見なし、一件に幕引きを図るヘンリー卿とドリアン、ヴァーノン・リーの『ミス・ブラウン』(1884)において、初対面の女(ミス・ブラウン)の出自について想像をたくましくし神秘化する詩人画家のウォルター・ハムリンもその例である。興味ぶかいのは、いずれの作にもペイターの姿が、濃淡はあるにしても重ねられていることだ。その「原型」のひとつは、同時代の知識人や文学者を風刺した W. H.マロックの『新しい国家』(1878)であろう。ペイターの戯画化であるローズは、トマス・フッドの詩を思い浮かべ、不幸な女の入水自殺に遭遇することを期待しながらテムズ川沿いを散歩している。ここには、生身の女の存在を審美化により抹消し再現しようとする欲望が露呈している。発表者の問いは、そうした「男性的」欲望とペイターのテキストとの関係にある。彼のセクシュアリティおよび風刺の心理的影響を考慮すれば、事態はさほど単純ではない。いくつかの作品を取上げて、考察したい。

ふたりのダンディーオスカー・ワイルドとマックス・ビアボーム

十枝内康隆

英国唯美主義における最後のダンディーと呼ぶに値する作家はマックス・ビアボーム(1872-1956)である。彼のデビュー作は「ある米国人」という偽名のもとに発表されたワイルド評(1893)であった。また、同年『スピリット・ランプ』誌に寄稿した「現代衣服の比類なき美しさ」というエッセイにおいては、服飾の芸術家としてのワイルドを称揚している。ビアボームはワイルドやその周囲の人物たちと親しく交わり、とりわけレジー・ターナー(1869-1938)とは生涯にわたって交友を続けた。だが、やがてワイルド裁判の頃を契機として、彼はワイルドと距離を取りながら、華燭を燈しつらねるようなワイルド流のダンディズムとは一線を画すようになる。ビアボームはワイルドに何を学び、またワイルドの何に反発するようになったのか、ふたりのダンディズムについて、ジェンダーやセクシュアリティの問題にも触れながら、「幸福な偽善者」(1897)や『過去を覗き見る』(1923)、またその他のエッセイや書簡等を通して考えてみたい。

ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』(1891)と「W. H.氏の肖像」(1889)では、主要な登場人物が作り上げるホモソーシャル共同体や彼らの発言、他の人物たちとの対比や関係性において、同性愛的な欲望が見え隠れする。しかしながら、これらの人物が殊更、男性性から逸脱しているわけではない。風習喜劇に登場するダンディたちも同様に、洒落者という呼称以上に彼らに逸脱的な欲望が明示されるわけではない。それにも拘らずこれらの登場人物のセクシュアリティに疑念が生じるとすれば、一つには美への過度な没頭や言及が、エロティックな眼差しや欲望を想起する可能性を秘めているからである。男性と美の関係は、男性性の定義に少なからず揺れを引き起こす要因となり得るのだ。このような観点から本発表では、19世紀後半の少年愛詩からワイルド作品やポルノ小説 *Teleny*(1893)に渡る幾つかの文学作品や視覚芸術と、J. A. シモンズや E. カーペンターら同性愛の理論化を試みた人々の視座と社会の反応を概観することで、同性愛的欲望の対象の美的昇華とそうした客体に魅かれる主体の位置を考察したい。そして、男性性から見た逸脱的欲望の多様な在り様を提示したい。